

19th International Congress on Glass 参加報告

旭硝子株式会社 中央研究所

向井 隆 司

Report on 19th International Congress on Glass

Takashi Mukai

Research Center, Asahi Glass Co., Ltd.

2001年7月2日～7月6日にかけて、スコットランドの首都エジンバラにて19th International Congress on Glassが開催された。

エジンバラは北緯約56度に位置し、日本の最北端よりはるかに北にある。エジンバラ空港に降り立つと梅雨明けで連日真夏日が続いていた日本の暑さが嘘のようで、非常に快適な気候であり、会議開催中には肌寒さを感じた日さえあった。また緯度が高いため、夜10時を過ぎてもまだ明るく、不思議な感覚で日々を過ごした。エジンバラは岩山に悠然とそびえ立つエジンバラ城を中心とし、その周囲に18世紀初めに造成されたニュータウンと、それ以前のオールドタウンがあり、中世ヨーロッパの面影を色濃く残した美しい街並みであった。街並みとは対照的に、会議が開催されたEdinburgh International Conference Centerはエジンバラ城から徒歩10分くらいのところに位置する非常に設備の整った新しい会議場であり、国際会議の場所としては十分の会議場であったといえる。

今回の会議は3年に1度開催されるガラスの国際会議であり（1998年第18回：サンフラ

ンシスコ）、世界各国から700人を越すガラスの研究者が集まった。そのうち日本からは1割強を占める85名ほどの参加者があり、大学と企業の参加人数はほぼ同数であったようである。

この会議はガラスの全分野の研究を対象にしており、基礎から応用、ガラス製造技術から光通信関連、はたまた考古学や教育に関する分野まで41もの多種多様な分野に分かれていた。招待公演43件、一般公演約300件、ポスターセッション約200件の発表が8会場にて並行して行われていた。

7月2日のOpening Ceremonyを皮切りに1週間にわたる会議が開催された。なお、Opening Ceremonyにおいて、本年度のGottardi賞を京都大学の内野氏が受賞された。やはり同じ日本のガラス研究者が受賞することは何ともうれしく思われる。心から祝福の意を表したい。

さて、発表内容についてであるが、上述したように本会議は41分野8会場に分かれて日々熱心な討論が繰り広げられていた。しかし、ガラスの全分野を対象とした会議であるが故、ナノ関連・IT関連等の新しい話題が必ずしも全面的にクローズアップされたわけではなく、特に今回はイタリアにて同時期に光アンブとファイバークレーティングという光通信分野の国際

会議が開催されていたようで、この分野に携わる多くの研究者がそちらに参加してしまい、本会議ではその分野の発表が十分でなかったように感じられた点が残念である。しかし、最先端の応用研究ではないが、例えばガラス溶解に関する原料や炉材の問題、あるいは清澄に関する基礎的研究、成形に関するシミュレーション開発とその応用、あるいはガラスの Redox 平衡や構造緩和といった基礎研究に関しては十分に議論が出来る場であり、そういった点では本会議は非常に意義があると感じた。筆者自身、フロートガラスの特性に関する基礎研究を報告し、普段文献でしかお目にかからない著名な方々と議論をさせてもらう機会を得て非常に有意義であったと感じている。なお、各発表の内容に関しては、分野が多様多様にわたっているため包括的な内容を報告することは困難であり、本報告では割愛させてもらう。

一方、本会議の開催中あるいはその前後に、ICG の統括技術委員会 (CTC)、各技術委員会 (TC) 主催の会議、研究発表会、シンポジウムなどが開催され、活発な議論が行われていたようである。筆者自身は TC の委員としては参加していないが、最終日に行われていた TC14 の Water in Glass のフォーラムを聴講した。ここでは計 11 件の報告がなされた。ガラス中の水は古くより取り上げられている問題であるが、今なおガラス製造において水分量の正確な測定およびそれをどう制御するかが非常に重要な要素の一つであることを再認識する良い機会であった。また、TC に参加した方々の話を聞いたところによると、共通して言えることは、TC は主として欧米の大学・企業間の技術交流

の場であり、専門家として組織の枠組みを越えて技術に関して活発に議論しているようである。個人的な主観ではあるが、欧米と比較してどちらかといえば企業と大学との間の隔たりが大きい日本の大学・企業の研究者にとっては組織の枠組みを越えて活発な議論をできる場があることはうらやましく思える。

なお、本会議では会議開催中の一日を使い参加者相互の親睦を深めるためのツアーに出かけることが恒例となっている。今回はスコットランド最古のウイスキー蒸留所にて本場のスコッチウイスキーを味わうとともに伝統的なハイランドゲームを楽しむツアーにでかけ、海外の研究者との友好を深めた。スコットランドの牧草地帯に響きわたるバグパイプの音が今でも心地よく耳に残っている。

最後に、本会議の運営をいただいた Society of Glass Technology の方々に感謝の意を表したいと思う。しかしながら、今回の会議では予め配布されたプログラムが頻繁に変更され、会場に行かないと当日のプログラムが分からないといった状態で、時には発表者さえいないお粗末な状況であった。会議の運営自体には難あり、というのが参加者に共通した認識ではなかっただろうか。

最終日の Closing Ceremony では、次回の第 20 回国際ガラス会議について、北陸先端大学の牧島教授より 3 年後の 2004 年 9 月 26 日～10 月 1 日に日本の京都国際会議場にて開催される旨のアナウンスがあった。今回の教訓を糧にさらに活発な会議になることを期待して筆をおくこととする。